
ドラゴンパニック

日高鳴海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンパニック

【Nコード】

N9944Y

【作者名】

日高鳴海

【あらすじ】

草花高校に通う少年、浅井竜吾はどこか巻き込まれやすい性質の持ち主。竜吾の周りには、様々な人が集まり、様々な出来事に巻き込まれていく。

第一話

遠羽市草花高校に行く道のりは沢山の桜の木が登校する学生を歓迎するかのようには咲き誇っている。

男子は上下黒の学ラン、左胸ポケットには桜をイメージした紋章、女子は下は黒、上は紺色のセーラー服に赤色のリボン、男子の制服のように左胸ポケットには桜の紋章というスタイル。

草花高校は一学年二百人、全校生徒六百人の生徒数を誇っていて、多くもなく少なくもない人数。

そんな草花高校の桜並木の坂を登る男子生徒がいた。
ていうか俺、浅井竜吾だ。

この花粉症持ちにとっては辛い道を歩いていると、

「ずび〜！ ああ〜……辛い」

「そりゃ花粉症の癖にマスクもせずにこの桜並木を歩くからだろ」

隣にはポケットティッシュで鼻をかみ、目を少しだけ赤くしている幼なじみ、小暮麻琴が歩いている。

麻琴とは小学生の頃から付き合いである。

「いやあ、マスクきれてて……今日は始業式だしすぐに終わると思つて……」

「毎年辛い思いしてるのに懲りないんだな。高校の近くにコンビニあったらるつに……」

俺達がいつも通っている通学路の途中には一軒のコンビニがあり、そこは草花高校の生徒によって成り立っているといっても過言ではない。

目を掻きながら麻琴は鼻が詰まった声で、

「お金が無くて買えなかったんだよ……」

「マスク位俺が買ってきてやるっつーの。先に学校に行つてな。マスク買つてくるから」

「でも悪いよ……」

「遠慮すんな。あ、クラス表だけ見ておいてくれ。確認するのめんどいからな」

「うん、わかっ　へくちっ！」

可愛らしい嚏と共に、麻琴の口から飛んできた唾が俺の顔に飛んできて来やがった！

しかも鼻からは某アニメの幼稚園児のようにブランブランと垂れ下がっていた。

き、汚ねえなあ……。

麻琴は特に動揺した素振りも見せず、ティッシュで鼻水を拭き取る。

「んじゃ頼むな」

「ん」

鼻柱を赤くしながら麻琴は頷く。

俺は草花高校の生徒がこの夏場にはキツイ坂を歩いているのを逆走していくのだった。

「お、竜吾じゃん。何してんの？」

コンビニに行くと、やっぱりと言つべきか、客の大半が草花高校の生徒だ。

そしてこいつ。

本人曰く地毛である茶髪を今時のジャニーズのような分け方をしている、山藤敦だ。

中学時代からの友人の一人。

「敦か、見て分からないのか？ お買い物だよ」

「ふーん、マスク一箱も買うなんてな。お前花粉症か何かだっけ？」

「いや、幼なじみの方だよ」

「ああ、小暮か。確かに毎年この時期になると、花粉症発症するもんな。幼なじみの為にマスクを買ってあげるなんて、竜ちゃん優しいな。」

ゴボツ！

敦が何だかうざい口調で何かを言ってきたため、つい鳩尾にグーパーを入れてしまった。

反省？ 何それ食えんの？

「いてて……痛いじゃねえか竜吾！」

「んなことより早く会計しに行こうぜ。遅刻しちまうぞ？」

「んなことって……まあ、それもそうだな」

と、レジに会計しにしようとした瞬間、ズボンの中に入れているケータイの着信音が鳴った。

この音楽はメールだな。

俺はポケットからケータイを取り出し、メールを見てみる。麻琴からだ。

タイトル：クラスは

本文：私と同じクラスだよ！ 二年三組だからね

「……二年三組か」

「ん？ 何のことだ？」

「クラスの事だよ。俺は二年三組らしい」

「俺は？」

「知るか」

俺は適当に「ありがとうな」とだけ送り、レジへと三十個入りマスクを置くのだった。

マスクを買った後、敦と桜並木の坂を歩いていた。周りにはあまり生徒は居なく、おそらく時間ギリギリなのかもしれない。草花高校

は八時三十分までに行けば遅刻じゃなくなる。ケータイを取り出し、時間帯を見る。

八時二十三分。

ここからなら教室まで五分位で着くため、ギリギリ間に合うな。

「ヤバくねえか？　へたしたら遅刻しちまうぜ」

周りをキョロキョロしながら不安そうに言う敦。

「大丈夫だろ。後八分あるんだし。余裕だ」

「そうか……なあ、突然だけど聞いてくれよ」

「ああ、いいよ」

「俺達今日から二年生だろ？」

「そうだな」

「二年生が終わるまでに俺は絶対に彼女を作ってみせる！」

「そうか、頑張れよ」

二年生になったの抱負を言った敦の言葉を受け流し、坂を登る。

「おおい！　もうちょっとリアクションしてくれてもいいんじゃないね

えの！？」

「お前去年も全く同じ事を言ってただろ」

つーか、中学時代にもこのようになことを言っていたような気がする。

「そうだった……？　と、とにかく！　俺は今年彼女持ちのリア充になってみせる！」

「……………」

「そんな如何にも「無理だろ」なんて顔すんな！」
「いや、そんな事はないぞ？」

適当にごまかし、校舎へと急ぐのだった。

ちなみに、敦も二年三組だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9944y/>

ドラゴンパニック

2011年11月30日00時52分発行